

昌平坂学問所および諸藩校における読書に関する一考察

A Study on Reading in Shoheizaka Gakumonjo and in Various Clan Schools

学籍番号：201121725

氏名：寶田 麻衣

Mai TAKARADA

寛政9年(1797)、幕府直轄の学問所である昌平坂学問所が開設された。そこでは、儒学の教授が行われ、教育に必要な書物は、文庫に所蔵されていた。諸藩校もこれに倣い、公的な教育機関においては儒学の教授が行われた。また、諸藩においても、文庫が設置され、学習に必要な書物が所蔵されていた。しかし、漢学の教授を主に行っていたにも関わらず、多くの和書の所蔵が見られる文庫がある。本論文では、昌平坂学問所や諸藩校に設置された文庫に焦点を当て、蔵書構成の分析および文庫運営に関する資料から、教育機関に所蔵される和書にはどのような書物が存在したのか、また、和書の読書とはどのような意味を持つものであったのかについて考察していく。

本論文では、近世期に武士の子弟を教育していた機関を研究対象とする。幕府直轄の学問所であった昌平坂学問所と14の藩校を対象とする。研究方法としては、次の2つの方法を採用することとする。まず、1つ目の方法としては、資料より文庫運営の実態を探る。2つ目の方法としては、各文庫の現在確認できる目録による蔵書分析である。

昌平坂学問所および諸藩校では、記録から、文庫が存在し利用されていたことがわかる。文庫利用の主な目的は、学問の助けとされることであった。これらの機関の教育は、主として漢籍を教材として儒学を教授することであった。そのため、すべての機関において、漢籍が所蔵されていた。しかし、漢籍だけではなく和書の所蔵も、すべての機関において見られる。和書の中でも、戦を題材とした「軍書」のジャンルに分類される書物が、昌平坂学問所を始め多くの藩校で見られる。これらは、歴史や戦史、兵学の一教材であったことが考えられる。しかし、それ以上に近世期の武士が自らの体験として持っていない戦における軍事行為の経験や、戦に臨む覚悟といったものの獲得が、軍書の読書の目的としてあったのではないかと思われる。これらの機関において求められた和書の読書とは、太平の世にあってもなお武士としてのアイデンティティを失わないことを目的として行われる行為であったと考えられる。

研究指導教員：綿抜 豊昭

副研究指導教員：白井 哲哉